

書評

関嘉寛 『ボランティアからひろがる公共空間』
(梓出版社)

木 前 利 秋

(大阪大学大学院人間科学研究科)

ボランティアと呼ばれる活動が日本で一般の人びとの眼を集めるようになってから、すでに久しい。NGO・NPOなども含めた、広い意味での市民社会組織 **civil society organization** にたいする一般の認知度も、最近では格段に高い。こうした市民の様々な活動を射程に収めるかたちで「市民社会」の概念を捉え直し、市民社会論の新しい地平を設ける理論的試みも、欧米ではすでに二〇年近くの歳月が過ぎている。一般の人びとにとってのみならず、アカデミーの研究対象としても、行政サイドの政策実施に関わる重要な担い手としても、その多様な活動はもはや無視することができない。

しかしこうした現状に比べると、とくに日本のボランティア活動に焦点を当てながら、現代社会のコンテクストにそくしてその意義を理論的に分析し、活動の意味についてある程度まとまりある体系的な考察をしたものは、予想外にすくない。たとえば市民社会論の視点から分析した NGO・NPO 論は欧米の文献でもかなりの量に上るが、そうした理論的成果を日本におけるボランティア活動にかんする考察に適用して、あらたな議論を体系だったかたちで提起したものは思ったほど多くない。具体的な活動報告の類や断片的な理論的試論はそれなりに見受けられるものの、大方は、一貫した大きな筋からなる議論にまで仕上がっていないのが実状である。「ボランティアや市民活動、NPO・NGO などの活動を現代日本の文脈で」読み解こうとした本書は、そうした欠を埋めるための一石を投じたという点で、まず評価してよい意欲作である。

ボランティアや市民活動、NPO・NGO などの事例は、何も最近の現象ではない。なにがしかの扶助団体、相互扶助組織などを念頭に置くならば、歴史はかなり古い。本書でも日本における市民活動とボランティアの歴史を簡明に描いた箇所がある。その一節で著者は、一九七〇年代の「市民運動にみられたような対抗的、反権力的な性格」を持つものでもなければ、「行政への利害実現回路を内在させた利益誘導型」でもなく、また「自治会にみられる半強制的な地縁型」でもない点に、今日のボランティアの新しさを見ている。

「現行の体制を根本的に変化させよう」とするわけではないが、かといって「従来通りの統治のあり方にも満足していない」——こうした性格に表れているボランティアの現代的な新しさを探り出すのみならず、今日なぜそうした活動の営為に格別の眼を向ける必要があるのかについて明らかにすること、本書の政治社会学的な考察の狙いをあえて一言でくくるなら、評者はこの二点にがあると見たい。

第一章で現代社会を、情報社会、グローバル化、新自由主義、新しい不平等といった諸相から描き出しているのも、ボランティア活動とその担い手たちが直面する新たな条件を浮き彫りにするためである。インターネットなどの情報技術によってボランティア、NPO・NGOなどの市民活動を促進する情報社会は、「新しい民主主義の可能性」を切り開くと同時に、「空間の規格化と均質化」というネガティブな側面をともし、グローバル化は、権力構造の脱中心化によって支配-被支配関係を不透明化し拡散させる一方、人びとの政治への関心をいっそう低下させて政治に対する無関心な態度を招きかねないこと、新自由主義の台頭は、グローバル化が進展するなかで国民的なアイデンティティを強化しながらも、経済的次元だけにとどまらない現代的な不平等を悪化させる傾向にみちびいていること——こうした現代社会における諸傾向の絡み合いのなかから浮き彫りにされるのは、意外にも、新たな条件下でボランティア、NPO・NGOなどの市民社会組織が帯びることとなる「政治的」意味である。ただし政治といっても、広い意味での「オルタナティブな政治」、ギデنزが「解放の政治」と区別して用いる「ライフ・ポリティクス」、自己実現の政治にほかならない。

ひところの「反権力的」で「対抗的」な性格をもった市民運動と比べると、（あるいは国際NGOのさまざまな活動に比較すると）ボランティアはどことなく政治的なものとは無縁の活動のように見なされやすい。著者はまずこのステレオタイプな見方に異を唱える。すでに「新しい社会運動」のなかに脈動していた「新しい政治パラダイム」は、非政治的な領域とみなされてきた局面に政治的な意味を読みとる。軍事的な安全保障と再分配を軸にした経済政策、反権力闘争に現れた「解放の政治」など、旧来の政治概念から袂を分かって、「アイデンティティ・ポリティクス」や「差異の政治」、「文化のポリティクス」など、政治の意味そのものを問い直す理論・思想面からの試みが、新しい政治概念の構築に濃い影を落としてきた。新しい社会運動から最近の市民社会組織に引き継がれた運動面での傾向は、その構築にもう一つ別の影を落としてもいるのである。

著者が「参加」をキーワードにしながら、その新しいあり方にボランティ

アの今日のあるべき姿を描き出そうとしたのも、こうした脈絡に即して理解するのが好便だろう。政治的参加といえば、特定の国家や地域に属する成員として、何らかのかたちで政治的な意思決定に積極的に関与する市民的「参画」がまず浮かぶ。しかし「参加」には、既成の政治的な諸制度から距離をとりながら、内部への参画とは違った「外部における参加」のかたちを取るケースもありうる。今日のボランティアに見受けられる新しさ、その積極的意義は、この「新しい参加」の形態を担ったところにある。

評者は、今日のボランティアの新しさのみならず、その新しさに注目する必要がある所以を、この「新しい参加」という概念に見たい。もしそれが実際に可能なら、それは旧来とはかなり違った社会的な変革の道に通じているからだ。著者はこの「新しい参加」につながるボランティアのあるべき姿をつきとめるために、「上からの公共性／外在化された公共性／未定形の公共性」という三つの層からなる公共性概念を提唱している。「公的」「公共の」という言葉が多義的であることは、つとにハーバーマスの指摘したことだが、著者はこの多義性を捕らえて、公権力に似た意味での「上からの公共性」、万人に共有されたものという意味での「外在化された公共性」、万人に開かれた場という意味での「未定形の公共性」の三層を区分し、その重なりと融合の一局面に、「新しい参加」の形態を位置づけている。新しい参加としてのボランティアが直接に関わるのは未定形の公共性である。しかしその関わりが上からの公共性や外在化された公共性と出会うとき、そこにある変容が生じて「cross-over な公共性」を生む可能性が開かれる。もちろんこれは場合によっては、ボランティアが「上からの公共性」によって「統治機構の動員装置」として利用される恐れと紙一重の所にある。しかし「新しい参加」の形態が未定形の公共性に関わるかぎり、さしあたっては上からの公共性の外部に位置したままで、その内部に絡み取られることはない。

著者が描き出した構図は、残念ながらまだ抽象的な次元での議論にとどまっており、具体例による裏づけがもっとあってもよかったとの印象はぬぐえない。がそれは、より一層の緻密な理論的掘り下げとともに、むしろ今後の課題というべきかもしれない。日本のボランティア活動にとどまらず、もっと広い「グローバルな市民社会」のコンテクストで、本書の議論がどれだけの応用力を発揮できるかも含めて、著者の今後の理論的展開に期待したい。